

林 紓 を 罵 る 快 楽 (1)

樽 本 照 雄

清末民初時期の翻訳界において、林紓は、他の翻訳者を圧倒して屹立する存在だった。それがどうしてあんな風になってしまったのか。突然、「あんな風」といわれてもわかる人にしか理解できない。おいおい説明する。

1 林紓の翻訳

林紓（1852-1924）、字は琴南、号を畏廬、冷紅生、踐卓翁などという。福建の貧しい家に生まれた*1。父親がはじめた商売がうまくいかず苦学する。台湾に活路を求めた父親を助けて帳簿づけをしたこともある。十八歳で結婚し、肺病をわずらい二十一歳のとき村塾で教え始めた。勉学を続けるかたわら絵画を学んだ。三十一歳の時、科挙の試験に合格して挙人になる。同期の合格者に高鳳岐（張元済と親しく1902年に商務印書館に入社した。高夢旦は弟）と鄭孝胥らがいる。役人にはならず、著述、翻訳、絵画を生業とした。日清戦争に破れたのを見て、新政をとる。古文（文言）をよくし、王寿昌の口述で小デュマ原作の『椿姫』を筆述した漢訳名『巴黎茶花女遺事』（1899年福州で刊行）によって有名になった。外国語に堪能な人物が口述し、林紓が古文で筆記する翻訳方式のはじまりである。四十八歳の時のことだ（年齢表示は数え年。以下同じ）。

林紓の翻訳した作品がどれくらいの数にのぼるか、以下に示す（単行本ではない。翻訳作品の数であるから注意されたい）。

1899年から数えて、1912年の中華民国成立を経た1916年までに146件の翻訳を発表している。1917年から1924年の林紓死去をへたのちの1925年までに、67件が公表

された。

1916年で区切ったのは、翌1917年より文学革命論が提起されるからだ。1899-1925年の全体をとおして翻訳数は、213件にのぼる。

清末民初の同時期に活動した人たちの業績を参考までにあげてみる。曾孟樸が1905-31年に22件を、周作人が1904-20年に42件を発表している。

主として清末時期であるならば、周桂笙が1903-10年で43件、呉禔の1905-13年の20件がある。

民国前後には、周瘦鵑が1910-25年に94件を発表して目につく。そのほか、劉半農が1914-18年で48件、胡適が1908-1919年に16件、沈雁冰（茅盾）が1918-19年の2年で12件というぐあいだ。

林紓のばあいは、それらとは比較にならないくらいに数が多い。しかも、翻訳した外国文学はイギリス1国とは限らない。ほかにアメリカ、フランス、ロシア、ドイツ、ベルギー、日本、スイスなど広範囲にわたる。数のうえだけならば、包天笑が他人との共訳を含んで1901-20年に109件というのが、林紓につく。それにしても213件に対しての109件だから、林紓の仕事量がきわだっただけ多いことがわかる。

大量でしかも多様な外国文学の翻訳を世に送り出したのを見ると、まさに超人的ということができる。それが可能だった理由は、簡単だ。翻訳にあたって、彼は他人との共同作業という方法を採用したからだ。イギリス文学なら英語の達人と、フランス文学であればフランス語の専門家と組む。翻訳者が口述し、林紓がその場で古文を使って筆述する。林紓個人についていうならば、膨大な時間を費やして外国語を習得する必要がない。また、自分が修得した外国語の種類にしばられるという制限とも無縁である。専門家の数をふやせば、世界各国の文学に対応できる。また、英語に翻訳された作品を選択すれば、より多くの外国文学を翻訳対象とすることが可能だ。各人の長所を有効に利用した翻訳方法である。

利点に重点をおく私の以上の簡単な説明は、中国においてはほとんど触れられたことがない。その理由を説明することも本稿の目的である。

清末時期に、商務印書館が発行した「説部叢書」と称する外国小説の翻訳シリーズがある。民国になって再版されてもいる。単行本全322種のうち、林紓の翻訳は147件を占めて全体の約46%にのぼる。のちに、林紓の翻訳だけ100種を抜き出し「林訳小説叢書」第1、2集と銘打って特別に発行された。1914年から15年にかけてのことだ。それくらい読者の人気を博した*2。売れると判断しなければ商務印書

館が出版するはずもない。

以上、こまごまと数字をあげたが、その意図は林紘の翻訳が量的に他の翻訳者をはるかに抜いていたという事実を確認するためなのだ。林紘は、1919年の五四時期よりも前から文学界では十分に著名人だった。

魯迅（周樹人）と周作人の周氏兄弟は、学生時代に林訳小説を好んだ。出版されると購入した。感化されて、清末に彼ら自身がハガードの作品1種を漢訳したほどだ。また、郭沫若が林訳小説のうちの特に3種類をあげて深く影響を受けたと告白しているのも有名な話だろう。のちの作家、評論家の多くが、林紘の翻訳によって外国文学の存在を知った。

だが、外国文学の翻訳者として栄光の頂点にあったように見えた林紘は、文学革命が提唱されはじめる五四時期前後から、新しい作家、評論家たちによって口をきわめて罵られることになる。

いわく、外国語を理解しない。いわく、作品選択に妥当性を欠く。いわく、省略誤訳が多い。林紘と彼の翻訳小説についての評価は、一転して地に落ちた。現在にいたるまで尾を引いているといっても過言ではない。

本稿は、外国文学翻訳の旗手であった林紘が、どのようにして批判の対象とされるようになったのか、その過程を明らかにするものである。

2 『青年雑誌』から『新青年』へ

林紘は、『巴黎茶花女遺事』を刊行してのちの1901年、北京へ居を移した。金台書院、五城学堂で教えながら、外国文学の翻訳を続けた。林紘の翻訳は社会を改良し人を感動させるためだ、と考える識者がいることは、彼の翻訳小説の序跋文を見ればわかる*3。なによりも、外国文学を翻訳することにおいて林紘の才能の一部は十分に発揮されたといえるだろう。林訳小説は、中国において伝統的に評価の低かった小説を見直す契機になった。その意味で、梁啓超が示した小説重視の主張は、林紘の翻訳によって実践され証明されたということもできる。

1903年、京師大学堂（北京大学の前身）訳書局に勤め、1906年には同じく京師大学堂預科と師範館の経学教員となった。1911年の辛亥革命時には、林紘はすでに六十歳である。1913年、京師大学堂を辞めてからも、著作、翻訳、絵画制作の生活を送り、死去する1924年まで続いた。

「林訳小説叢書」が商務印書館から発行されていたころの上海において、ある啓蒙雑誌が創刊された。雑誌の題名を『青年雑誌』という。群益書社を出版元とし、創刊号（1915.9.15）の「社告」には、該誌の刊行は若者諸君と修身治国の道を相談するためだとうたう。通信欄を設けて読者からの投書とそれに対する返答を掲載するのも新趣向だ。若者を啓発しようという意図だった。

おなじ号の巻頭を飾ったのが陳独秀の「つつしんで若者に告げる（敬告青年）」だ。内容は、6つの標語に集約される。

すなわち、1 自主であって奴隷ではない（自主的而非奴隷的）、2 進歩であって保守ではない（進歩的而非保守的）、3 進取であって隠遁ではない（進取的而非退隱的）、4 世界であって鎖国ではない（世界的而非鎖国的）、5 実利であって虚飾ではない（実利的而非虚文的）、6 科学であって空想ではない（科学的而非想像的）という。

若者に期待するのは、前者であって後者であってはならない、との主旨であることは見ればわかる。善悪好悪を対比し一方を批判否定するという簡単な論理の構造は、理解しやすい。

否定する姿勢をより強調して、文学に的を絞って発言をするのが胡適である。最初は、読者の投稿で通信欄に登場した。

胡適のばあい

『青年雑誌』は約半年の休止時間をおいて、1916年9月1日付の第2巻第1号から『新青年』と改題する。その第2巻第2号（1916.10.1*4）通信欄に、胡適が陳独秀にあてた手紙が掲載された。

胡適は、文学が墮落した原因を「文が質にまさっている」ところに求める。「形式があって精神がない」という意味だ。胡適は、つぎのように主張する。文学革命をいうならば、つぎの8項目から手をつけなければならない。

- 1 典故を用いない（不用典）
- 2 陳腐なきまり文句を用いない（不用陳套語）
- 3 対句を重んじない（不講对仗）
- 4 俗字俗語を避けない（不避俗字俗語）
- 5 文法の構造を重んじなければならない（須講求文法之結構）

以上は形式上の革命である。

- 6 病気でもないのにうめかない(不作無病之呻吟)
- 7 古人のことばを模倣しない。ことばには個性がなければならない(不摹倣古人語語須有個我在)
- 8 内容のあることを言わなければならない(須言之有物)

以上は精神上の革命である。

どこかで見かけた標語だと思われるのも当然だ。のちの有名な「文学改良芻議」で主張する内容と一致している。順番がわずかに異なっているだけだ。陳独秀がさきに示した否定的論調を、胡適が十分に吸収したうえで利用していることがわかる。

上の「7 古人のことばを模倣しない」について、胡適は精神上に分類している。だが、実はことばにまつわるものだから、形式に入るのではないか。してみると、内容に関して述べるのは、8項目のうちの2項目にすぎない。しかも、その内容がどうあるべきかについては、具体的に説明しているわけではない*5。

1917年、『新青年』の編集部は、北京に移転した。陳独秀が、蔡元培に招かれて北京大学教授に就任したからである*6。

つぎに、胡適が「文学改良芻議」(第2巻第5号1917.1.1)において主張したのは、各時代にはその時代の文学があるということだ。そのたどりつく結論は、卑しまれている白話小説こそが、現代における中国文学の正統である、となる。末尾に添えられた陳独秀のことばにも「白話文学が中国文学の正統となるであろう」とある。胡適と陳独秀の両者の意見が一致しているからこそ『新青年』に論文が掲載された。もっとも、白話文学を主張する該論文は、古文で書かれている。

8項目宣言は、先の通信に見られるものと内容は同じだ。ただ順序が入れ替わっただけ。主張の重点は、あくまでも文章の形式にある。内容に関していえば、その比重は重くない。しかも、文章上は否定の姿勢を強調する。約1年後に発表する彼の「建設的文学革命論」(第4巻第4号1918.4.15)は、「不」を前面に押し出してより否定的な標語に発展している。彼のいう「八不主義」を原語のままに、矢印部分にあわせて掲げる。掲載順の数字を見れば、ここでも順序を入れ替えている。さきに通信欄でかけたものと同じでしつこいと思いはする。だが、胡適の主張が雑誌上で3回も繰り返されているくらいに、当時は人の目を引く主張であった。また、「八不主義」に変化するのを見るためにも、重ねて引用する。

- 1 内容のあることを言わなければならない(須言之有物)
 - 1 不做「言之無物」的文字。
- 2 古人を模倣しない(不摹倣古人)
 - 7 不摹倣古人
- 3 文法を重んじなければならない(須講求文法)
 - 6 不做不合文法的文字。
- 4 病気でもないのにうめかない(不作無病之呻吟)
 - 2 不做「無病呻吟」的文字。
- 5 陳腐なきまり文句をできるだけ除く(務去爛調套語)
 - 4 不用套語爛調。
- 6 典故を用いない(不用典)
 - 3 不用典
- 7 対句を重んじない(不講对仗)
 - 5 不重对偶 文須廢駢詩須廢律。
- 8 俗字俗語を避けない(不避俗字俗語)
 - 8 不避俗話俗字

「1内容のあること」とは「4病気でもないのにうめかない」と同じことをいっているように思える。しかし、その中身が具体的に説明してあるわけではない、とくりかえしていわざるをえない。

胡適が文学の正統と認める作品は、なにか。評価するに足ると胡適が認める文学作品はといえば、すなわち白話小説だというのだ。

今日の文学で世界「第一流」の文学と比較して遜色のないものは、ただ白話小説(我仏山人、南亭亭長、洪都百鍊生の3人のみ)があるだけだ。3-4頁

胡適が例にあげたのは、いずれも清末の作家の名前である。我仏山人は吳趸人を、南亭亭長は李伯元を指す。洪都百鍊生とは、劉鉄雲のことだ。別の箇所では、『儒林外史』、『水滸伝』、『石頭記』の書名を出したりもする。こちらは、1912年に成立した中華民国よりもはるか以前に発表された作品だ。アメリカ滞在中の胡適には、

当時、中国で流行していた小説についての知識がなかったのかもしれない。ついでに言えば、のちに胡適は亜東図書館から李伯元著『官場現形記』、劉鉄雲著『老残遊記』などを復刻出版しており、この時の論文に関係しているといえる。

該論文において、外国文学の翻訳は、胡適にとっては対象外であったようだ。言及がないから私はそう判断する。ただ、1カ所に『十字軍英雄記』という書名が見える。林紘、魏易訳のスコット原作である（Walter Scott “The Talisman” 商務印書館1907）。林訳小説というだけで、胡適がこれについて評論しているわけではない。なにしろ林紘の名前さえも出していない。この時点で、林紘の姿は見えないといっ
ていいだろう。

陳独秀のばあい

白話を強調した胡適に続いて陳独秀の「文学革命論」が同じ第2巻第6号（1917.2.1）に掲載された。

創刊号で示した二者択一の文章構造をここでも採用している。文学革命軍の3大主義という。

飾り立てて迎合する貴族文学を打倒し、平易で抒情の国民文学を建設せよ。
陳腐で見栄っ張りの古典文学を打倒し、新鮮で誠実な写実文学を建設せよ。
まわりくどく難解な山林文学を打倒し、明瞭で通俗な社会文学を建設せよ。

標語を掲げるのは、それなりに理解しやすい。だが、いくら標語を叫んだところで、標語だけのことだ。打倒の対象は漠然としている。ただ、改革、革命を行なうには困難な現状を、文学を突破口にして攻撃している、というのであればわからなくもない。

仲間内の議論

今でこそ有名な胡適と陳独秀の論文である。また、『新青年』誌上で「文学革命」「文学改良」「文学革新」と関連する文章も公表された。しかし、意見が出るといっても該雑誌上に限られており、仲間内だけのものだった。

たとえば、第3巻第1号（1917.3.1）の通信欄には、いくつかの意見が掲げられている。

錢玄同が、胡適の「文学改良芻議」に触発されて自らの考えをのべる。結局のところ、文学の進化を肯定して小説を近代文学の正統であると認める。最近の小説では、李伯元『官場現形記』、吳趸人『二十年目睹之怪現狀』、曾孟樸『孽海花』をあげ、また、蘇曼殊にも触れる。しかし、胡適が持ち上げた劉鉄雲『老殘遊記』は「老新党」にすぎないと切り捨てた。錢玄同の文章で注目されるのは、現代文学の革新は梁啓超に始まる、と認識しているところだろう。ただし、1ヵ所だけ見逃すことのできない部分がある。翻訳して引用する。

また、某氏のように人と西欧小説を訳して、もっぱら『聊齋志異』の筆づかいである。一方で、韓愈、柳宗元を引いて自らを重んじたがっているが、その価値は、桐城派の下なのだ。だが、世間は好文豪と見なしている。

他人と共同して、しかも古文を用いて外国小説を翻訳しているといえば、誰か。「某氏」と名前をぼやかしてはいる。だが、普通に考えれば、林紘の名前を当然のように思いうかべる。ここには、林紘批判のきざしが、かすかにだが確かに出現している。注目する必要がある。

劉半農「我之文学改良觀」(第3巻第3号1917.5.1)は、論じる範囲が広い。文学、言語、文字、散文、韻文さらには記号にまで及ぶ。また、古文を評価するなど少しの異論を差しはさんでいるが、改革の必要性をのべる点においては、胡適の「八種改良」と陳独秀の「三大主義」および錢玄同らの主張の延長線上にある。

同じ号に掲載された胡適「歴史的文学觀念論」は、ひとつの時代にはその時代の文学があることを主張する。すなわち、今日の文学は、白話文学が正統なのだという意見である。これが「歴史的文学觀念」だ。白話文学の正統性を主張することは、それ以外の、つまり今日の古文文学を否定することになる。胡適の一貫した姿勢である。

胡適が批判するのは、今という時代に生きながら時代にあわない古文を使い続けている「古文家」なのだ。

「古文家」を否定する気分は溢れてはいる。しかし、具体的な攻撃目標が設定されているわけではない。批判すべき現存する人物の名前は、でていないことに注目しておく。

劉半農「詩と小説の精神上的革新(詩与小説精神上之革新)」(第3巻第5号1917.

7.1) は、詩が思想において「真」でなければならないと強調し、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) から大量に引用する。小説には、真理にもとづいて発言し理想世界をつくること、それぞれが見た世界について詳細に描写することのふたつを求める。ヘンリー・ヴァン・ダイク (Henry van Dyke) を引用する。彼が評価するのは、中国では、曹雪芹、李伯元、吳趸人である。イギリスではディケンズ (狄鏗士)、サッカレー (薩克雷)、キプリング (吉伯林)、スチープンソン (史梯文生) を、フランスのゴンクール (龔枯爾) 兄弟、モーパッサン (莫泊三) を、アメリカはオー・ヘンリー (政[欧]亨利)、マーク・トウェイン (馬克吐温) をあげる。排除するのは、ウェルズ (惠爾司) の科学小説、コナン・ドイル (康南道爾) の探偵小説、ル・キュー (維廉勒苟) の秘密小説、ルブラン (瑟勒勃郎) の強盗小説だ。

この時点で、すでに大衆小説を排除しようとする意識が表面化していることに注目しておく。

上記論文には、作品名が具体的に出されていない。また、中国における翻訳にも言及してもない。彼は、外国語ができたから原書を読んで得た感想なのだろう。だが、読者にしてみれば、翻訳を読むことによってでしか劉半儂の意見を検証することができない。

参考までに、1917年の時点で、劉半儂が言及する外国作家たちの漢訳があるかどうかを簡単に見てみよう。数字は、その年から翻訳があることを示す。漢訳は1件だけとは限らない。複数の訳者による複数の翻訳が出版されている可能性がある。

劉半儂が評価する作家

ディケンズ 林紓ほか1907

サッカレー 周瘦鵑1917

キプリング 胡適1915

スチープンソン 林紓ほか1908

ゴンクール兄弟 陳嘏1917

モーパッサン 陳景韓ほか1904

オー・ヘンリー 鉄樵1914 (林紓訳は1925)

マーク・トウェイン 嚴通ほか1905

×劉半儂が評価しない作家

ウェルズ 楊心一ほか1915 (林紓訳は1921)

コナン・ドイル 張坤徳ほか1897（林紓訳は1907）

ル・キュー 陳景韓ほか1904

ルブラン 楊心一ほか1912

上を見るかぎり、林紓の翻訳が、ほかの漢訳に比較して一方に偏向しているということはできない。劉半農が評価する作家の作品を、林紓が早くから翻訳しているのに気づいてもいい。その意味で、林訳は幅広く目配りされている。

翻訳作品を見る限り、ここから林紓批判は出てきそうにもない。

同じ号の「読者論壇」に載った易明「改良文学之第一歩」は、文学改良には「俗語」を使うことからはじめなければならない、と主張する。論説、書簡、小説のすべてに適用せよという。

第4巻第1号（1918.1.15）「通信」欄には、銭玄同あて胡適の手紙、銭玄同の返答、劉半農あて銭玄同の手紙、劉半農の返答がある。さらに、「読者論壇」欄に北京大学学生の傅斯年が「文学革新申義」を投稿している。

いずれも、仲間内の討論にとどまっているだけだ。白話の使用という胡適の主張は、彼自身のことばでいえば「ダーウイン以来の進化論の影響を受けていた」*7。進化の法則だと考えれば、古文から白話への転換は必然ということになる。自然選択によっていずれそうなる運命だろう。ならば、淘汰されると決まったものをわざわざ攻撃する必要はないではないか、と私なら考える。実作の出現が進化の法則の正しさを証明するだろう、とも思う。しかし、胡適、陳独秀、銭玄同、劉半農らは、なにもせずに到達する結果には満足できなかったらしい。だからこそ胡適の「八不主義」につながる。否定に力を入れたい。自分たちの前に立ちはだかる強力な敵がいてこそ、改革、革命を主張するカイがあるというものだ。だが、その敵が姿を現わさない。

鄭振鐸が、当時の状況を回想して「彼らが「文学革命」の大旗を掲げて以来、有力な敵たちに出会うことはなかった」*8と説明している。ここには、革命を提唱する若者たちのいらだちがあからさまに記述されている。

そうして、現状を打開するためにせっぱ詰まってでっちあげたのが、架空の人物王敬軒に手紙を書かせた捏造事件である。林紓を攻撃して、対立が生起して論争になる。

普通は、このように記述が流れていく。堪忍袋の緒を切った林紓が、はなばなし

く登場してきて若者を攻撃する。若者がそれに反撃を加える。そうして派手な泥仕合になる、という筋書きである。新旧世代が対立したというわかりやすい展開なのだ。

だが、事実は、異なる。それ以前に不思議な状況が出現している。今まで、研究者のだれも注目したことがない。林紓が反論をしているような、そうでないような、批判といえるかどうかともあいまいな林紓の文章が存在している。

林紓が奇妙な登場の仕方をする

私が「奇妙な」というのは、林紓が書いたといわれる文章を読むことができないからである。少なくとも私が本稿を書き始める前は、そうだった。

問題の文章は、「古文は廃止すべきではないことを論じる（論古文之不宜廢）」という。題名を見ると、林紓が胡適らの主張を否定しているように推測できる。想像をたくましくすれば、林紓が書いた強烈な攻撃文のような気もする。だが、全文を見る機会がないのだから、そうと決めつけるわけにもいかない。林紓が古文を擁護し、胡適らの対立者として姿をあらわした証拠として重要な文章だと考えられる。だが、重ねていうが、不思議なことにこの文章を読むことができない。林紓研究の関係資料集をさがしても、どこにも収録されていないのだ。詳細が不明だと書いてあったりしてどこかおかしい。

『新青年』第3巻第1号（1917.3.1）の通信欄において、銭玄同が林紓を当てこすった文章を公表していることを指摘した。林紓の「論古文之不宜廢」は、これに触発されたのだろうか。はっきりしない。

林紓が書いた「幻の」該文を紹介するのは、ニューヨーク在住の胡適である。彼は陳独秀にあてた手紙（第3巻第3号1917.5.1）のなかで、次のようにいう。

このごろ林琴南氏の新しい著作「古文は廃止すべきではないことを論じる（論古文之不当廢）」という一文をみて、喜んで読んだ。われわれ古文を非難する者にとって研究の足しになるはずだと考えたからだ。ところが大いに失望した。林氏がいうには、「ラテン語が廃止できないことを知れば、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元もまた廃止すべきではないということに自然になるのだ。私はその道理は知っているが、そうである理由を説明することができない。これは古いものを好むものの病気であろう（知臘丁之不可廢。則馬班韓柳亦自有其不宜廢

者。吾識其理。乃不能道其所以然。此則嗜古者之癩也)」と。4頁

胡適が引用するのだから林紘の文章の重要箇所だろう。だが、そこには古文をラテン語になぞらえていることばがあるだけだ。林紘は、古文を静かに擁護する。日常生活とは無関係に生き残るのが古文の運命だという考えは、あまりにも弱々しい。胡適は、林紘の文章をもう1ヵ所引用する。その古文が間違っているという。

嗚呼、有清往矣。論文者独数方姚。而攻掇之者麻起。而方姚卒不之踣。4頁

清朝の昔に、方苞、姚鼐を攻撃するものがおびただしく出てきたが、包姚は、最後まで倒れることはなかった、というのが大意である（方姚は、桐城（古文）派の代表的人物である方苞、劉大櫟、姚鼐らを指している）。

うしろの「而方姚卒不之踣」は文法に合わない、と胡適は説明する。つまり、目的語をとらない自動詞である「踣」を否定するばあいは、「而方姚卒不踣」か「方姚卒不因之而踣」としなければならない。

胡適は、古文の大家である林紘の文章が間違いだと指摘した。その結論は、林紘が古文の大家で「古文は廃止すべきではない」といい、「そうである理由を説明することができない」というのであれば、古文は廃止すべきであるというのもまたはっきりしたことはなからうか、である。

古文を廃止しろという胡適の文章が、古文で書かれているのも、また矛盾したことだと再びいう。

注目しなければならないのは、胡適が攻撃の対象とした人物として林紘の名前がはじめて明確に登場していることだ。

胡適が、大いに失望したのも理由のないことではない。白話を痛罵し、その提唱者を抹殺してやる、というような威勢のよさは、林紘の文章には皆無だからだ。すくなくとも、胡適が引用した部分から受ける印象である。

新青年グループの敵対者として林紘が存在するといっても、その登場のしかたは、颯爽というのとはほど遠い。私はそう感じる。まず、全文を読むことができないこと、さらに、外国に滞在中の胡適に引用されているということが原因なのだろう。遠くの方で、ゆらゆらとかすかに存在しているだけのようだ。

それにしても、林紘の該文は、どこにあるのか。引用しているのが胡適だけだと

いうのも気になる。今までに出版された資料類を見ると、文章の題名をいずれも「論古文之不当^マ廢」としている*9。

楊聯芬が論文名と掲載誌を明らかにしたのは、比較的最近のことだ*10。「論古文之不宜廢」というのが正しい題名で、『民国日報』(1917.2.8)に掲載されたという。今まで題名が間違っただけのまま伝わっていたのもおかしなことだと気づく。胡適が誤記したのを研究者は長年にわたって検証していないことになる。題名の誤りを訂正することができなかつたのがその証拠だ。

該文は、埋もれた林紓の文章だという意味になる。ゆえに私は「幻の」という形容詞をつけた。文学革命を圧殺しようとした古文家の代表であるはずの林紓が書いた批判文である。なぜ、全文が明らかではないのか。

調べてみて驚いた。掲載紙である『民国日報』は、オーストラリアのシドニーで発行されていた新聞だというのだ。華僑が1910年に創刊した民主主義革命を宣伝する内容であった*11。

林紓は、なぜオーストラリアの新聞に文章を寄せたのか。まず疑問に思う。彼とオーストラリアの接点が見つからない。そもそも、林紓が白話運動に反対し胡適らを敵視しているのであれば、北京あるいは上海の刊行物に文章を発表するのが普通だろう。その機会は、いくらでもあったはずだ。

外国で発行されていた新聞に掲載された文章だから、胡適の手紙だけに見えるのだろうか。北京の新青年グループは、文書を入手する努力をしなかつたのか。あるいは、胡適は新聞を切り抜くなり写しをつくるなりして彼らに郵送しなかつたのか。疑問の多い林紓の文章だ、と私は考える。

林紓の「論古文之不宜廢」

胡適に引用された部分だけを見て、林紓の文章の主旨を推察したところで不正確な把握しかできない。

林紓の該文を読むために、今回さがして得ることができた。

林琴南の署名があるこの文章は、以下のとおり。新出資料だから原文のままを掲げる。

論古文之不宜廢 (林琴南) (『民国日報』1917.2.8)

文無所謂古也。唯其是。顧一言是。則造者愈難。漢唐之藝文志。及崇文總目中。

文家林立。而何以馬班韓柳。独有千古。然則林立之文家。均不是。唯是此四家矣。顧尋常之賤牒簡牘。率皆行之以四家之法。不惟伊古以來無是事。即欲責之。以是。亦率天下而路耳。吾知深於文者。万不敢其設為此論也。然而一代之興。必有數文家揜於其間。是或一代之元氣。盤礴鬱積。發洩而成至文。猶大城名都。必有山水之勝狀。用表其靈淑之所鍾。文豪之發顯於一代之間。亦正類此。嗚呼。有清往矣。論文者獨數方姚。而攻揜之者麻起。而方姚卒不之踣。或其文固有其是者存耶。方今新學始昌。即文如方姚。亦復何濟於用。然而天下講藝術者。仍留古文一門。凡所謂載道者。皆屬空言。亦特如歐人之不廢臘丁耳。知臘丁之不可廢。則馬班韓柳亦自有其不宜廢者。吾識其理。乃不能道其所以然。此則嗜古者之痼也。民國成立。士皆剽竊新學。行文亦汎之以新名詞。夫學不新。而唯詞之新。匪特不得新。且拳其故者而盡亡之。吾甚虞古系之絕也。向在杭州。日本齊藤少將謂余曰。敝國非新。蓋復古也。時中國古籍。如兩宋樓之藏書。日人則盡括而有之。嗚呼。彼人求新而惟舊之寶。吾則不得新而先殞其舊。意者後此求文字之師。將以厚幣聘東人乎。夫馬班韓柳之文。雖不協於時用。固文字之祖也。嗜者學之。用其淺者以課人。轉轉相承。必有一二鉅子。出肩其統。則中國之元氣。尚有存者。若棄擲踐唾而不之惜。吾恐國未亡而文字已先之。幾何不為東人之所笑也。

新発見である林紘の文章をあらためてながめる。

『新青年』第3巻第1号(1917.3.1)に見える錢玄同の文章が林紘を当てこすっていたことと、何らかのつながりがあるのかと思ってもみた。だが、発表の日時(1917.2.8)を見れば、林紘の該文は、錢玄同の文章とは関係なく書かれていることが判明する。

その内容は、主として中華民国成立以後の文章界について、林紘が日常に感じていることを静かに述べているものだと思われる。中心は、胡適が引用した部分にほかならない。くりかえし以下に示す。

「ラテン語が廃止できないことを知れば、司馬遷、班固、韓愈、柳宗元もまた廃止すべきではないということに自然になるのだ。私はその道理は知っているが、そうである理由を説明することができない。これは古いものを好むものの病気であろう」

林紘は、ただひたすら古文を擁護するだけだ。

売り立てのために蔵書の抄録が出回っていたらしい。商務印書館の夏瑞芳がそれを手にした。編訳所に入所していた張元済に向かって、夏は、購入するつもりだと告げた。編訳の資料とすると同時に図書館をつくる時の基礎にするともいう。夏が準備したのは8万円であった*13。

張元済が以上を紹介していかかったのは、経営規模の小さい商務印書館だったが夏瑞芳の決断で書籍購入のために大金を用意したという、その夏の剛胆さである。しかし、このエピソードは、当時の商務印書館が夏社長のワンマン経営であったことをはしなくも証明している。ただ、当時、商務印書館には雨山長尾楨太郎の日本人が勤務していたが、彼らの反応について張元済は言及していない。

日本人すなわち岩崎家の静嘉堂文庫が支払ったのは25万両だ、と張元済は聞いた。張は時の軍機大臣栄慶に京師図書館の基礎とするようすすめたがいれられなかったとも*14。実際は、陸樹藩が最初提示したのは50万両で35万円から25万円までに減額した。最終的には10万円だったらしい。

蔵書をめぐって日中の知識人が大騒ぎを演じたわけだ。その結果、蔵書は日本に渡ってしまった。林紘の嘆きは、大きかったと理解できよう。古文とそれに関連する文化財の擁護という彼の姿勢には一貫したものがある。

古文は中国の生命力だから、それを惜しげもなく棄ててしまえば国が滅びる前に文字が死んでしまうと恐れる。そうなれば日本人に笑われることになりはしないだろうか。林紘は、日本人を借りて、中国人への危惧の気持ちを表明する。

林紘の文章の主調をいってみれば、「悲しみ」であり「嘆き」であり「危惧」であり「恐れ」である。

こう見ていくと、林紘の文章の後半には、重要な言葉が登場していることにお気づきだろう。ご賢察のとおり、胡適があえて引くことをしなかった日本人（原文：日人、東人）だ。

見ればわかる。林紘は、日本と日本人を批判するために書き込んだわけではない。その逆なのだ。日本と日本人を引き合いに出して中国文章界の現状に対する失望の感情をすなおに吐露している。ひたすら古文を援護しているだけのことだ。

私が注目するのは、胡適が、林紘がのべた日本と日本人の部分を見逃した点である。よりによって日本と日本人を賛美するか、と批判をしてもいいところではなかろうか。

だが、斉藤少将のことばは確認することはできないにしても、甯宋楼の蔵書が日

本人の手に落ちたことは事実だ。これについて胡適は批判することができない。日本人を非難すれば、すぐさま、購入しなかった、あるいは購入できなかった中国人そのものを攻撃することになるからだ。無視した、というよりも無視せざるをえなかった理由であろう。それを飲み込んで表にださなかったところに、事実を口にした林紘に対する胡適の内に秘めた怒りを感じるのはいきすぎだろうか。

「論古文之不宜廢」は、林紘六十六歳の時の文章である。六十六歳といえ、十分に老人だ。しかし、ただの老人ではない。外国文学の翻訳によって当時の文学界に大きな貢献をしている老人だ。その支持者も多く存在していたにちがいない。しかし、多くは沈黙したままで、聞こえてくるのは、仲間内とはいえ威勢のいい「文学革命」「文学改良」「文学革新」などのかけ声ばかりだ。林紘にしてみれば、自分の一生をささげた古文が今にも棄てられそうな情況を目の当たりにすれば、嘆きたくもなる。普通に見れば、老いの繰り言である。

当時、胡適は二十七歳だから、彼から見れば林紘は祖父といってもいい世代だ。それだけ歳のひらいた胡適が目をつけた林紘の文章だった。 罍

【注】

- 1) 林紘の経歴については、主として以下の文献による。張俊才「林紘年譜簡編」(薛綏之、張俊才編)『林紘研究資料』福州・福建人民出版社1983.6。以下、『研究資料』と称する。林薇「林紘伝」『林紘選集』(小説巻上)成都・四川人民出版社1985.12
- 2) 謝菊曾「《説部叢書》和《林説小説》」(「涵芬楼往事」)『隨筆』第6集1980.2。鄭逸梅「林紘訳《茶花女遺事》及其他」(『書報話旧』上海・学林出版社1983.8)では、『林説小説』第1集は59種、第2集は58種という(33頁)。100種をこえてしまい、奇妙だ。
- 3) 陳熙績「(歇洛克奇案開場)序」丁未(1907)冬月
- 4) 汲古書院の影印本では、なぜかしら第1巻第2号の奥付になっている。
- 5) 樽本「胡適は『老残遊記』をどう読んだか」で説明したことがある。『清末小説閑談』所収
- 6) 高平叔『蔡元培年譜長編』(上冊 北京・人民教育出版社1996.3 / 中冊1996.11)によると、蔡元培が北京大学校長に就任するよう発令されたのは、1916年12月26

日だった(上冊629頁)。また、陳独秀の北京大学文科学長の発令は、1917年1月13日だ(中冊5頁)。それにもない、新青年雑誌社も北京に移転する。ただし、『新青年』奥付で「北京東安門内箭竿胡同九号/新青年雑誌編輯部」という表示に変わるのは第4巻第1号(1918.1.15)からである。藤田正典「新青年10年の歩み」(『新青年別巻』汲古書院1977.3)には、つぎのようにある。「彼(陳独秀)は1917年初め、北京大学校長蔡元培の招きにより北京大学文科学長になり、上海より北京へ移転した。これにもなつて<新青年>の編集部も北京に移り、彼の周囲には進歩的知識分子が集まってきた。その1人に胡適がいた」
2頁

- 7) 胡適「導言」『中国新文学大系』第1集建設理論集 上海良友図書印刷公司1935.10.15。影印本。19頁
- 8) 「導論」『中国新文学大系』第2集文学論争集 上海良友図書印刷公司1935.10.15。影印本。6頁
- 9) 張俊才「林紆年譜簡編」『研究資料』47頁、「林紆著訳系年」『研究資料』535頁
- 10) 楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』北京大学出版社2003.11。123頁
- 11) 史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。142頁
- 12) 齊藤少将とは、だれか。ひとつの手掛かりは杭州という地名だ。林紆が杭州に住んでいたのは、1898年から1900年にかけてのことだった。明治34[1901]年に少将となっている齊藤太郎がいる。林紆の杭州在住期間と時期的に少しズレがあるので、確定できない。その他の齊藤姓をみたが、該当する人物を探し当てることはできなかった。外山操編『陸海軍将官人事総覧(陸軍篇)』(芙蓉書房1981.9.1/1982.3.1第2刷)を参照した。
- 13) 張元濟「東方圖書館概況・縁起(1926年)」『(1897-1992)商務印書館九十五年我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1。21頁
- 14) 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』北京・商務印書館1991.12。60頁

(たるもと てるお)